夜叉ヶ池

泉鏡花

場所　越前国大野郡鹿見村琴弾谷

時　現代。——盛夏

人名　萩原晃（鐘楼守）

百合（娘）

山沢学円（文学士）

白雪姫（夜叉ヶ池の主）

湯尾峠の万年姥（眷属）

白男の鯉七

大蟹五郎

木の芽峠の山椿

鯖江太郎

鯖波次郎
虎杖の入道
十三塚の骨
夥多の影法師
黒和尚鯰入（剣ヶ峰の使者）
与十（鹿見村百姓）
その他大勢
鹿見宅膳（神官）
権藤管八（村会議員）
斎田初雄（小学教師）
畑上嘉伝次（村長）

伝吉（博徒）
小鳥風呂助（小相撲）
穴隈鉱蔵（県の代議士）
　劇中名をいうもの。——（白山剣ケ峰、
千蛇ケ池の公達）

三国岳（みくにだけ）の麓（ふもと）の里に、暮六（くれむ）つの鐘きこゆ。――幕を開く。

萩原晃（はぎわらあきら）この時白髪（しらが）のつくり、鐘楼（しょうろう）の上に立ちて夕陽（せきよう）を望みつつあり。鐘楼は柱に蔦（つた）からまり、高き石段に苔（こけ）蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐（おもむろ）に段を下りて、清水に米を磨（と）ぐお百合（ゆり）の背後に行（ゆ）く。

晃　水は、美しい。いつ見ても……美しいな。

百合　ええ。

その水の岸に菖蒲（あやめ）あり二三輪小さき花咲く。

晃　綺麗（きれい）な水だよ。（微笑（ほほえ）む。）

百合　（白髪の鬢（びん）に手を当てて）でも、白いのでござ

いますもの。
晃　そりゃ、米を磨いでいるからさ。……（框（かまち）の縁に腰を掛く）お勝手働き御苦労、せっかくのお手を水仕事で台なしは恐多い、ちとお手伝いと行こうかな。
百合　可（よ）うございますよ。
晃　いや……お手伝いという処だが、お百合さんのそうした処は、咲残った菖蒲を透いて、水に影が映（さ）したようでなお綺麗だ。
百合　存じません。
晃　賞（ほ）めるのに怒る奴（やつ）がありますか。
百合　おなぶり遊ばすんでございますものを。――そ

して旦那様（だんなさま）は、こんな台所へ出ていらっしゃるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃　鐘を撞（つ）く旦那はおかしい。実は権助（ごんすけ）と名を替えて、早速お飯（まんま）にありつきたい。何とも可恐（おそろし）く腹が空いて、今、鐘を撞いた撞木（しゅもく）が、杖（つえ）になれば可（い）いと思った。ところで居催促（いざいそく）という形（かた）もある。

百合　ほほほ、またお極（きま）り。……すぐお夕飯にいたしましょうねえ。

晃　手品じゃあるまいし、磨いでいる米が、飯に早変わりはしそうもないぜ。

百合　まあ、あんな事を——これは翌朝（あした）の分を仕掛け

ておくのでございますよ。

晃　翌朝の分――ああ、お所帯(しょたい)もち、さもあるべき事です。いや、それを聞いて安心したら、がっかりして余計空いた。

百合　何でございますねえ。……お菜(かず)も、あの、お好きな鴫焼(しぎやき)をして上げますから、おとなしくしていらっしゃいまし。お腹が空いたって、人が聞くと笑います。

晃　（縁を上る）誰に遠慮がいるものか、人が笑うのは、ね、お前。

百合　はい。

晃　お互いに朝寝の時――

百合　知りませんよ。（莞爾（にっこり）俯向（うつむ）く。）

晃　煩（うるさ）く藪蚊（やぶっか）が押寄せた。裏縁で燻（いぶ）してやろう。（納戸、背後（うしろ）むきに山を仰ぐ）……雲の峰を焼落（やきおと）した、三国ヶ岳は火のようだ。西は近江（おうみ）、北は加賀、幽（かすか）に美濃（みの）の山々峰々、数万（すまん）の松明（たいまつ）を列（つら）ねたように旱（ひでり）の焔（ほのお）で取巻いた。夜叉（やしゃ）ヶ池へも映るらしい。ちょうどその水の上あたり、宵の明星の色さえ赤い。……なかなか雨らしい影もないな。

百合　……その竜が棲（す）む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します。ここの清水も気のせいやら、流（ながれ）が

沢山（たんと）痩（や）せました。このごろは村方で大騒ぎをしています。……暑さは強し……貴方（あなた）、お身体（からだ）に触（さわ）りはしますまいかと、——めしあがりものの不自由な片山里は心細い。私はそれが心配でなりません。

晃　流（ながれ）が細ったって構うものか。お前こそ、その上夏痩せをしないが可（い）い。お百合さん、その夕顔の花に、ちょっと手を触ってみないか。

百合　はい、どういたすのでございますか。

晃　花にも葉にも露があろうね。

百合　ああ冷い。水の手にも涼しいほど、しっとり花が濡れましたよ。

晃　世間の人には金が要ろう、田地も要ろう、雨もなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照っても乾きはしない。その、露があれば沢山なんだ。

（戸外に向える障子を閉す。）

百合　貴方、お暑うございましょう。開けておきなさいましても、もう、そちこち人も通りますまい。

晃　何、更って、そんな心配をするものか。……晩方閉込んで一燻し燻しておくと、蚊が大分楽になるよ。

時に蚊遣の煙なびく、

学円。日に焼けたるパナマ帽子、背広の服、落着

のある人体（じんてい）なり。風呂敷包を斜（はす）に背（しょ）い、脚絆草鞋穿（きゃはんわらじばき）、杖（ステッキ）づくりの洋傘（こうもり）をついて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

学円　今朝、明六（あけむ）つの橋を渡って、ここで暮六つの鐘を聞いた。……

お百合は笊（ざる）に米をうつす。

学円　やあ、お精が出ます。（と声を掛く。）

百合　はい。（見向く。）

学円　途中、畷（なわて）の竹藪（たけやぶ）の処へ出て……暗くなった処で、今しがた聞きました。時を打ったはこの鐘でしょうな。

百合　さようでございます。

学円　音も尊い！……立派な鐘じゃ。鐘楼（つりがねどう）へ上（あが）ってみても差支えはありませんか。

百合　（笊（ざる）を抱えて立つ）ええ、大事ござんせん。けれども貴客（あなた）、御串戯（ごじょうだん）に、お杖やなんぞでお敲（たた）き遊ばしては不可（いけ）ません。

学円　西瓜（すいか）を買うのではありません。決して敲いてはみますまい。（笑う。）

百合　御串戯おっしゃいます。……いいえ、悪戯（いたずら）を遊ばすようなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、その鐘は、明六つと、暮六つと、夜中丑満（うしみつ）に一

度、――三度のほかは鳴らさない事になっておりますから、失礼とは存じましたが、ちょっと申上げたのでございます。さあ、どうぞ御遠慮なく、上って御覧なさいまし。（夕顔の垣根について入(いら)んとす。）

学円　ああ、ちょっと……お待ち下さい。鐘を見ようと思いますが、ふと言(ことば)を交わしたを御縁に、余り不躾(ぶしつけ)がましい事じゃが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞い下さらんか。

百合　お易い事でございます。さあ、貴客(あなた)、これへお掛けなさいまし。

学円　御免下さいよ。

百合　真（まこと）に見苦しゅうございます。

学円　これは――お寺の庫裡（くり）とも見受けません。御本堂は離れていますか。

百合　いいえ、もう昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございます。

学円　鐘ばかり……

百合　はい。

学円　鐘ばかり……成程、ところで西瓜の一件じゃ。（帽子を脱ぐ、ほとんど剃髪（ていはつ）したるごとき一分刈（いちぶがり）の額を撫（な）でて）や、西瓜と云えば、内に甜瓜（まくわうり）でもありますまいか。――茶店でもない様子――（見廻す。）

片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に
　灯影映る。

学円　この上、晩飯の御難題は言出しませんが、いかんとも腹が空いた。

百合　ほほ。（と打笑み）筧の下に、梨が冷してござんす、上げましょう。（と夕顔の蔭に立廻る。）

学円　（がぶがぶと茶を呑み、衣兜から扇子を取って、煽いだのを、と翳して見つつ）おお、咲きました。貴女の顔を見るように。

百合　ええ？（聞返す。）

学円　いや、髪の色を見るように。

百合　もう、年をとりますと、花どころではございません。早く干瓢（かんぴょう）にでもなりますれば、……とそればかりを待っております。

学円　小刀（ナイフ）をこれへお遣わし……私（わし）が剥（む）きます。――お世話を掛けてはかえって気遣いな。どれどれ……旅の事欠け、不器用ながら、梨（なし）の皮ぐらいは、うまく剥きます。おおおお氷よりよく冷えた。玉を削るとはこの事じゃろう。

百合　旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客（あなた）は、どれから、どれへお越しなさいますえ？

学円　さて名告（なの）りを揚げて、何の峠を越すと云うでも

ありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問という処を、遣（や）って歩行（ある）く……もっとも、帰途（かえりみち）です。――涼しくば木の芽峠、音に聞こえた中の河内（かわち）か、（庇（ひさし）はずれに山見る眉）峰の茶店（ちゃや）に茶汲女（ちゃくみおんな）が赤前垂（あかまえだれ）というのが事実なら、疱瘡（ほうそう）の神の建場（たてば）でも差支えん。湯の尾峠を越そうとも思います。――落着く前（さき）は京都ですわ。

百合　お泊りは？　貴客（あなた）、今晩の。

学円　ああ、うっかり泊りなぞお聞きなさらぬが可（い）い。言尻（ことばじり）に着いて、宿の御無心申さんとも限らんぞ。ははは、いや、串戯（じょうだん）じゃ。御心配には及ばんが、

何と、その湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂じゃろうかね。

百合　山また山の峠の中に、嘘のようにもお思いなさいましょうが、まったくだと申します。

学円　谷の姫百合も緋色（ひいろ）に咲けば、何もそれに不思議はない。が、この通り、山ばかり、重（かさな）り累（かさな）る、あの、巓（いただき）を思うにつけて、……夕焼雲が、めらめらと巌（いわお）に焼込（やけこ）むようにも見える。こりゃ、赤前垂より、雪女郎で凄（すご）うても、中の河内が可（い）いかも分らん。何にしろ、暑い事じゃね。——やっとここで呼吸（いき）をついた。

百合　里では人死（ひとじに）もありますッて……酷（ひど）い旱（ひでり）でございますもの。

学円　今朝から難行苦行（なんぎょうくぎょう）の体（てい）で、暑さに八九里悩みましたが――可恐（おそろ）しい事には、水らしい水というのを、ここに来てはじめて見ました。これは清水と見えます。

百合　裏の崕（がけ）から湧（わ）きますのを、筧（かけひ）にうけて落します……細い流（ながれ）でございますが、石に当って、りんりんと佳（い）い音（ね）がしますので、この谷を、あの琴弾谷（ことひきだに）と申します。貴客、それは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げましょうか。

学円　何が今まで我慢が出来よう、鐘堂（つりがねどう）も知らない前に、この美（うつくし）い水を見ると、逆蜻蛉（さかとんぼ）で口をつけて、手で引掴（ひッつか）んでがぶがぶと。

百合　まあ、私はどうしましょう、知らずにお米を磨（と）ぎました。

学円　いや、しらげ水は菖蒲（あやめ）の絞（しぼり）、夕顔の花の化粧になったと見えて、下流の水はやっぱり水晶。ささ濁りもしなかった。が、村里一統、飲む水にも困るらしく見受けたに、ここの源（みなもと）まで来ないのは格別、流れを汲取るものもなかったように思う……何ぞ仔細（しさい）のある事じゃろうか。

百合　あの、湧きますのは、裏の崕（がけ）でござんすけれど。

学円　はあ、はあ。……

百合　水の源（もと）はこの山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄（すご）い大池がございます。その水底（みなそこ）には竜が棲（す）む、そこへ通うと云いまして——毒があると可恐（こわ）がります。——もう薄暗くて見えますまいけれども、その貴客（あなた）、流（ながれ）の石には、水がかかって、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交（まじ）って、それは綺麗でございますのを、お池の主の眷属（けんぞく）の鱗（うろこ）がこぼれたなんのッて、気味が悪いと申すんでございますから。……

学円　綺麗な石が毒蛇の鱗？　や、がぶがぶと、豪（えら）い

ことを遣(や)ってしもうた。（と扇子をもって胸を打つ。）

百合　まあ、（と微笑(ほほえ)み）私どもがこの年まで朝夕飲んで何ともない、それをあの、人は疑うのでございます。

学円　もっとも、もっとも。ものを疑うのは人間の習いですよ。私(わし)は今のお言(ことば)で、決して心配はしますまい。現に朝夕飲んでおらるる、――この年紀(とし)まで――（と打ち瞻(まも)り）お幾歳(いくつ)じゃな。

百合　…………

学円　まあさ、失礼じゃが、お幾歳です？

百合　御免なさいまし、……忘れました。……

学円　ははは、俚言（ことわざ）にも、婦人に対して、貴女はいつ死ぬとは問うても可（い）い。が、いつ生れた、とは聞くな——とある。これは無遠慮に出過ぎました。……お幾歳じゃと年紀（とし）は尋ねますまい。時に幾干（いくら）ですか。

百合　幾干かとおっしゃって？

学円　代価じゃ。

百合　あの、お代、何の？……お宝……ま、滅相（めっそう）な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

学円　茶も茶じゃが、いやあこれは、髯（ひげ）のようにもじゃもじゃと聞えておかしい。茶も勿論、梨を十分に頂

いた。お商売でのうても無代価では心苦しい。ずばりと余計なら黙っても差置きますが、旅空なり、御覧の通りの風体（ふうてい）。ちゃんと云うて取って下さい。

百合　そうまでお気が済みませんなら、少々お代を頂きましょうか。

学円　勿論ともな。

百合　でも、あの、お代とさえ申しますもの、お宝には限りません。そのかわり、短いのでも可（よ）うござんす、お談話（はなし）を一つ、お聞かせなすって下さいましな。

学円　談話をせい、……談話とは？

百合　方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しで

ございます。

学円　その談話を？

百合　はい、お代のかわりに頂きます。貴客（あなた）には限りませず、薬売の衆、行者（ぎょうじゃ）、巡礼、この村里の人たちにも、お間に合うものがござんして、そのお代をと云う方には、誰方（どなた）にも、お談話を一条（ひとつ）ずつ伺います。沢山（たんと）お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでござんす。

学円　むむ、これこそ談話じゃ。（と小膝（こひざ）を拍（う）て）面白い。話しましょう。……が、さて談話というて、差当り――お茶代になるのじゃからって、長崎から

強飯（こわめし）でもあるまいな。や、思出した。しかもこの越前（えちぜん）じゃ。

晃　（細く障子を開き差覗（さしのぞ）く。）

時に小机に向いたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らんとしたるなるが、学円と双方、ふと顔を合せて、何とかしけん、燈火（ともしび）をふっと消す。

百合　どんなお話、もし、貴客（あなた）。

学円　……時にここで話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合　いいえ、外（ほか）にはお月様ばかりでござんす。

学円　道理こそ燈(あかり)が消えて、ああ、蚊遣(かやり)の煙で、よくは見えぬが、……納戸に月が射(さ)すらしい。——お待ちなさい。今、言いかけた越前の話というのは、縁の下で牡丹餅(ぼたもち)が化けたのです。たとえば、ここで私(わし)がものを云うと、その通り、縁の下で口真似をする奴(やつ)がある。村中が寄って集(たか)って、口真似するは何ものじゃ。狐か、と聞くと、違う。と答える。狸か、違う、獺(かわうそ)か、違う、魔か、天狗(てんぐ)か、違う、違う。……しまいに牡丹餅か、と尋ねた時、おうと云って消え失(う)せたという——その話をする気であったが、……まだ外に、月が聞くと言わるるから、出直して、

別の談話(はなし)をする気になった。お聞きなさい。これは現在一昨年(おととし)の夏——

一人、私(わし)の親友に、何かかねて志す……国々に伝わった面白い、また異(かわ)った、不思議な物語を集めてみたい。日本中残らずとは思うが、この夏は、山深い北国(ほっこく)筋の、谷を渡り、峰を伝って尋ねよう、と夏休みに東京を出ました。——それっきり、行方が知れず、音沙汰(おとさた)なし。親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽くして捜したが、皆目跡形(あとかた)が分らんから、われわれ友だちの間にも、最早(もは)や世にない、死んだものと断念(あきら)めて、都を出た日を命日にする始末。いや、

一時は新聞沙汰、世間で豪（えら）い騒ぎをした。……自殺か、怪我（けが）か、変死かと、果敢（はか）ない事に、寄ると触ると、袂（たもと）を絞って言い交わすぞ！　あとを隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男じゃに、貴女、世間には変った事がありましょうな。……

百合　ああ、貴客（あなた）、貴客、難有（ありがと）う存じます。……ほんとうに難有う存じました。（とにべなく言う。）

学円　そんなに礼を云うて、茶代のかわりになるのですかい。

百合　もう沢山でございます。

学円　それでは面白かったのじゃね。

百合　……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは沢山でございます。

学円　さて談話(はなし)はこれからなんじゃ、今のはほんの前提(まえおき)ですが。

百合　どうぞ、……結構でございますから、……そして貴客、もう暗くなります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でございましょうから。……

学円　いやいや、談話の模様では、宿をする事もあると言われた。私(わし)も一つ泊めて下さい、——この談話は実(み)がありますから。

百合　先刻(さつき)は、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くん

じゃない。……その言（ことば）について、宿の無心でもされたらどうするとおっしゃって。……もう、清い涼（すずし）いお方だと思いましたものを、……女ばかり居る処で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は気味が悪い。

学円　気味が悪いな？　牡丹餅の化けたのではないですが。

百合　こんな山家は、お化（ばけ）より、都の人が可恐（こお）うござんす、……さ、貴客どうぞ。

学円　これは、押出されるは酷（ひど）い。（不承々々に立つ。）

百合　（続いて出で、押遣（おしや）るばかりに）どうぞ、お立

ち下さいまし。

学円　婦人ばかりじゃ、ともこうも言われぬか。鉢の木ではないのじゃが、蚊に焚く柴もあるものを、……常世の宿なら、こう情なくは扱うまい。……雪の降らぬがせめてもじゃ。

百合　真夏土用の百日旱に、たとい雪が降ろうとも、……（と立ちながら、納戸の方を熟と視て、学円に瞳を返す。）御機嫌よう。

学円　失礼します。

晃　（衝と蚊遣の中に姿を顕し）山沢、山沢。（ときっぱり呼ぶ。）

学円　おい、萩原、萩原か。

百合　あれ、貴方。（と走り寄って、出足を留めるように、膝を突き手に晃の胸を圧える。）

晃　帰りやしない、大丈夫、大丈夫。（と低声に云って）何とも言いようがない、山沢、まあ――まあ、こちらへ。

学円　私も何とも言いようが無い。十に九ツ君だろうと、今ね、顔を見た時、また先刻からの様子でもそう思うた、けれども、余り思掛けなし――（引返して框に来り）第一、その頭はどうしたい。

晃　頭もどうかしていると思って、まあ、許して上っ

てくれ。

学円　埃ばかりじゃ、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入る）いや、その頭も頭じゃが、白髪はどうじゃ、白髪はよ？……

晃　これか、谷底に棲めばといって、大蛇に呑まれた次第ではない、こいつは仮髪だ。（脱いで棄てる。）

学円　ははあ……（とお百合を密と見て）勿論じゃな、その何も……

晃　こりゃ、百合と云う。

お百合、座に直った晃の膝に、そのまま俯伏して縋っている。

学円　お百合さんか。細君も……何、奥方も……

晃　泣く奴があるか、涙を拭いて、整然（ちゃん）として、御挨拶（ごあいさつ）しな。

と言ううちに、極（きま）り悪そうに、お百合は衝（つ）と納戸へかくれる。

晃　君に背中を敲（たた）かれて、僕の夢が覚めた処で、東京に帰るかって憂慮（きづか）いなんです。

学円　（お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら）いや、私（わし）の顔を見たぐらいで、萩原――この夢は覚めんじゃろう。……何、いい夢なら、あえて覚めるには及ばんのじゃ……しかし萩原、夢の裡（うち）に

も忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃　むむ。

学円　君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか分らんが、皆まず御無事じゃ。

晃　ああ、そうか。難有（ありがた）い。

学円　私（わし）に礼には及ばない。

晃　実に済まん！

学円　さてこれはどうしたわけじゃ。

晃　夢だと思って聞いてくれ。

学円　勿論、夢だと思うておる。……

晃　委（くわ）しい事は、夜すがらにも話すとして、知ってる

通り……僕は、それ諸国の物語を聞こうと思って、北国筋を歩行（ある）いたんだ。ところが、自身……僕、そのものが一条（ひとくだり）の物語になった訳だ。――魔法つかいは山を取って海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取って木（こ）の葉にもする。木の葉を蛙（かえる）にもするという、……君もここへ来たばかりで、もの語（かたり）の中の人になったろう……僕はもう一層、その上を、物語、そのものになったんだ。

学円　薄気味の悪い事を云うな。では、君の細君は、……（云いつつ憚（はばか）る。）

晃　（納戸を振向く）衣服（きもの）でも着換えるか、髪など撫（なで）

つけているだろう。……襖（ふすま）一重だから、背戸へ出た。

……

学円　（仲上り納戸越に透かして見て）おい、水があるか、蘆（あし）の葉の前に、櫛（くし）にも月の光が射（さ）して、仮髪（かつら）をはずした髪の艶（つや）、雪国と聞くせいか、まだ消残って白いように、襟脚、脊筋も透通る。……凄（すご）いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかいか。

晃　可哀想（かわいそう）な事を言え、まさか。

学円　ふん。

晃　この土地、この里——この琴弾谷が、一個（ひとつ）の魔法つかいだと云うんだよ。——

山沢、君は、この山奥の、夜叉ケ池というのを聞いたか。

学円　聞いた。しかもその池を見ようと思って、今庄（いまじょう）駅から五里ばかり、わざわざここまで入込（いりこ）んだのじゃ。

晃　僕も一昨年（おととし）、その池を見ようと思って、ただ一人、この谷へ入ったために、こういう次第になったんだ。

――ここに鐘がある――

学円　ある！　何か、明六つ、暮六つ……丑満（うしみつ）、と一昼夜に三度鳴らす。その他は一切音をさせない定（さだめ）じゃと聞いたが。

晃　そうだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度ずつは必ず鳴らさねばならないんだ。

学円　それは？

晃　ここに伝説がある。昔、人と水と戦って、この里の滅びようとした時、越（えつ）の大徳泰澄（だいとくたいちょう）が行力（ぎょうりき）で、竜神をその夜叉ヶ池に封込（ふうじこ）んだ。竜神の言うには、人の溺（おぼ）れ、地の沈むを救うために、自由を奪わるるは、是非に及ばん。そのかわりに鐘を鋳て、麓（ふもと）に掛けて、昼夜に三度ずつ撞鳴（つきな）らして、我を驚かし、その約束を思出させよ。……我が性は自由を想う。自在を欲

する。気ままを望む。ともすれば、誓（ちかい）を忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲（みなぎ）らそうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものの数ともするものでない。が、約束は違（たが）えぬ、誓は破らん――但しその約束、その誓を忘れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞（つ）く事を怠るな。――山沢、そのために鋳た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、たちどころに、大雨（たいう）、大雷（だいらい）、大風とともに、夜叉ケ池から津浪が起って、村も里も水の底に葬って、竜神は想うままに天地を馳（は）すると……こう、この土地で言伝える。……そのために、明六つ、暮六

っ、丑満つ鐘を撞く。……

学円　（乗出でて）面白い。

晃　いや、面白いでは済まない、大切な事です。

学円　いかにも大切な事じゃ。

晃　ところで、その鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思う。

学円　君か。

晃　僕だよ。すなわち萩原晃がその鐘撞夫(かねつき)なんだよ。

学円　はてな。

晃　ここに小屋がある……

学円　むむ。

晃　鐘撞が住む小屋で、一昨年(おととし)の夏、私が来て、代る

までは、弥太兵衛と云う七十九になる爺様が一人居て、これは五十年以来、いかな一日も欠かす事なく、一昼夜に三度ずつこの鐘を打っていた。山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。君も夜叉ケ池を見に来たと云う。私がやっぱり、池を見ようと、この里へ来た時、暮六つの鐘が鳴ったんだ。弥太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があけたら池まで案内させる約束で、小屋へ泊めて貰った処。その夜、丑満の鐘を撞いて、鐘楼の高い段から下りると、爺は、この縁前で打倒れた――急病だ。死ぬ苦悩をしながら、死切れないと云って、悶える。—

――こうした世間だ、もう以前から、村一統鐘の信心が消えている。……爺（じい）が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌（たなそこ）をめぐらさず、田地田畠、陸は水になる、沼になる、淵（ふち）になる。幾万、何千の人の生命（いのち）――それを思うと死ぬるも死切れぬと、呻吟（うめ）いて搔（もが）く。――虫より細い声だけれども、五十年の明暮（あけくれ）を、一生懸命、そうした信仰で鐘楼を守り通した、骨と皮ばかりの爺（じい）が云うのだ。……鐘の自（おのず）から鳴るごとく、僕の耳に響いた。……且（かつ）は臨終の苦患（くげん）の可哀（あわれ）さに、安心をさせようと、――心配をするな親仁（おやじ）、鐘は俺が撞いてやる、――と

はっきり云うと、世にも嬉しそうに、ニヤニヤと笑って、拝みながら死んだ。その時の顔を今に忘れん。が、まさか、一生、ここに鐘を撞いて終ろうとは思わなかった。丑満は爺が済ました、明六つの鐘一度ばかり、代って撞くぐらいにしか考えなかった。が、まあ、爺が死ぬ、村のものを呼ぼうにも、この通り隣家（となり）に遠い。三度の掟（おきて）でその外は、火にも水にも鐘を撞くことはならないだろう。

学円　その鳴らしてならないというは、どうした次第（わけ）じゃね？

晃　鐘は、高く、ここにあって――その影は、深く夜

叉ケ池の碧潭に映ると云う。……撞木を当てて鳴る時は、凩にすら、そよりとも動かない、その池の水が、さらさらと波を立てると聞く。元来、竜神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、礼を欠く事に当る。……

学円　その道理じゃ、むむ。

晃　鐘も鳴らせん……処で、不知案内の村を駈廻って人を集めた、——サア、弥太兵衛の始末は着いたが、誰も承合って鐘を撞こうと言わない。第一、しかじかであるからと、爺に聞いた伝説を、先祖の遺言のように厳に言って聞かせると、村のものは哄と笑

う。……若いものは無理もない。老寄（としより）どもも老寄どもなり、寺の和尚（おしょう）までけろりとして、昔話なら、桃太郎の宝を取って帰った方が結構でござる、と言う。癪（しゃく）に障った――勝手にしろ、と私もそこから、（と框（かまち）を指し）草鞋（わらじ）を穿（は）いて、すたすたとこの谷を出て帰ったんだ。帰る時、鹿見村（しかみむら）のはずれの土橋の袂（たもと）に、榎（えのき）の樹の下に立ってしょんぼりと見送ったのが、（と調子を低く）あの、婦人（おんな）だ。

その日の、明六つの鐘さえ、学校通いの小児（こども）をはじめ、指（ゆび）さしをして笑う上で、私が撞いた。この様子では、最早や今日から、暮六つの鐘は鳴るまいな！……

……もしや、岩抜け、山津浪、そうでもない、大暴風雨（おおあらし）で、村の滅びる事があったら、打明けた処……他（ほか）は構わん、……この娘の生命（いのち）もあるまい――待て、二三日、鐘堂（つりがねどう）を俺が守ろう。その内には、とまた四五日、半月、一月を経（ふ）るうちに、早いものよ、足掛け三年。――君に逢（あ）うまで、それさえ忘れた。……また、忘れるために、その上、年に老朽ちて世を離れた、と自分でも断念（あきらめ）のため。……ばかりじゃ無い、……雁（かりがね）、燕（つばめ）の行（ゆ）きかえり、軒なり、空なり、行交（ゆきか）う目を、ちょっとは紛らす事もあろうと、昼間は白

髪の仮髪を被る。

学円　（黙然として顔を見る。）

晃　（言葉途絶える）そう顔を見るな、恥入った。

学円　（しばらく、打案じ）すると、あの、……お百合さんじゃ、その人のために、ここに隠れる気になったと云うのじゃ。

晃　……ますます恥入る。

学円　いや、恥ずるには及ばん。が、どうじゃ、細君を連れて東京に帰るわけには行かんのかい。

晃　何も三ヶ国と言わん。越前一ヶ国とも言わん。われわれ二人が見棄てて去って、この村と、里と、麓

に棲(す)むものの生命をどうする。

学円　萩原、（と呼びつつ、寄り）で、君はそれを信ずるかい。

晃　信ずる、信ずるようになった。萩原晃はいざ知らん、越前国三国ヶ岳の麓、鹿見村琴弾谷(ことひきだに)の鐘楼守(しょうろうもり)、百合の夫の二代の弥太兵衛は確(たしか)に信じる。

学円　（ひたりと洋服の胡坐(あぐら)に手をおき）何にも言わん。そう信ぜい。堅く進ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、天がこの村のために、お百合さんを造り置いて、鐘楼守を、ここに据えられたものかも知れん。君たち二人は二柱(ふたはしら)の村の神じゃ。

就中（なかんずく）、お百合さんは女神じゃな。
百合　（行燈（あんどん）を手に黒髪美しく立出づる）私、どうしたら可（よ）うございましょう。
学円　や、これは……
百合　貴客（あなた）、今ほどは。
学円　さて、お初に……ははは、奥さん。
百合　まあ。……（と恥らう。）
晃　これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。
百合　（黙って手をつく。）
学円　はいはい。いや、御挨拶はもう済みました。

貴女(あなた)嚔(くしゃみ)は出ませなんだか。

晃　うっかり嚔なんぞすると、蚊が飛出す。

百合　あれ、沢山(たんと)おなぶんなさいまし。

晃　そんなに、お前、白粉(おしろい)を粧(つ)けて。

百合　あんな事ばかりおっしゃる。（と優しく睨(にら)んで顔を隠す。）

学円　何にしろ、お睦(むつま)じい……はははは、勝手にお噂(うわさ)をしましたが、何は、お里方、親御、御兄弟は？

晃　山沢、何にもない孤児(みなしご)なんだ。鎮守の八幡(はちまん)の宮の神官(かんぬし)の一人娘で、その神官の父親(おとっ)さんも亡くなった。叔父があって、それが今、神官の代理をしている。

……これの前だが、叔父というのは、了簡（りょうけん）のよくない人でな。

学円　それはそれは。

晃　姪（めい）のこれを、附けつ廻しつしたという大難ぶってす。

百合　ほんとうに、たよりのない身体（からだ）でございます。何にも存じません、不束（ふつつか）ものでございますけれど、貴客（あなた）、どうぞ御ふびんをお懸けなすって下さいまし。（しんみりと学円に向って三指（みつゆび）して云う。）

学円　（引き入れられて、思わず涙ぐむ。）御殊勝ですな。他人のようには思いません。

晃　（同じく何となく胸せまる。涙を払って）さあさあ、親類というお言葉なんだ。遠慮のない処、何にも要らん。御吹聴の鴫焼で一杯つけな。これからゆっくり話すんだ。山沢、野菜は食わしたいぜ、そりゃ、甘いぞ。

学円　奥方、お立ちなさるな。トそこでじゃな、萩原、私は志した通り、これから夜を掛けて夜叉ケ池を見に行く気じゃ。種々不思議な話を聞いたら、なお一層見たくなった。御飯はお手料理で御馳走になろうが、お杯には及ばん、第一、知ってる通り、一滴も飲めやせん。

晃　成程、そうか、夜叉ヶ池を見に来たんだ。……明日（あした）にしては、と云うんだけれども、道は一里余り、が、上りが嶮（けわ）しい。この暑さでは夜が可（い）い。しかし、四五日は帰さんから、明日の晩にしてくれないかい。

学円　いや、学校がある。これでも学生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、もう切詰めじゃ。

晃　それは困った、学校は？……先刻（さっき）、落着く先は京都だと云ったようだな。

学円　むむ、去年から。……みやづかえの情（なさけ）なさじゃ。何しろ、急ぐ。

晃　分った、では案内かたがた一所に行く。

学円　君も。

晃　……直ぐに出掛けよう。

学円　それだと、奥方に済まんぞ。

晃　何を詰（つま）らない。

百合　いいえ……（と云いしがしおしおと）貴方（あなた）、直ぐにとおっしゃって、……お支度は、……

晃　土橋の煮染屋（にしめや）で竹の皮づつみと遣（や）らかす、その方が早手廻（はやてまわし）だ。鯡（にしん）の煮びたし、焼どうふ、可（よ）かろう、山沢。

学円　結構じゃ。

晃　事が決れば早いが可い。源佐衛門は草履で可し、最明時どのは、お草鞋、お草鞋。

学円　やあ、おもしろい。奥さん、いずれ帰途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。小菜を入れて食べさして発せて下さい。時に、帰途はいつになろう。……

晃　さあ、夜が短い。明方になろうも知れん。

学円　明けがた……は可いが、（と草鞋を穿きながら）待て待て、一所に気軽に飛出して、今夜、丑満つの鐘はどうするのじゃ。

晃　百合が心得ておる。先代弥太兵衛と違う。仙人で

はない、生身の人間。病気もする、百合が時々代るんだよ。

学円　では、池のあたりで聞きましょう。――奥方しっかり願います。

百合　はい、内をお忘れなさいませんように、私は一生懸命に。（と涙声にて云う。）

晃　……おい、あの、弥太兵衛が譲りの、お家の重宝（ちょうほう）と云う瓢箪（ひょうたん）を出したり、酒を買う。――それから鎌を貸しな、滅多に人の通わぬ処、路はあっても熊笹ぐらいは切らざあなるまい。……早くおし。

百合　はい、はい。

学円　やあ、どぎどぎと鋭いな。（と鎌を見る。）

晃　月影に……（空へかざす）なお光るんだ。これでも鎌を研ぐことを覚えたぜ。――こっちだ、こっちだ。（と先へ立つ。）

百合　お気をつけ遊ばせよ。（とうるみ声にて、送り出づる時、可愛き人形袖にあり。）

晃　何だい、こんなもの。（見返る。）

百合　太郎がちょっとお見送り。（と袖でしめつつ）小父ちゃんもお早くお帰りなさいまし、坊やが寂しゅうございます。（と云いながら、学円の顔をみまもり、小家の内を指し、うつむいてほろりとする。）

学円　（庇《かば》う状《さま》に手を挙げて、また涙ぐみ）御道理《ごもっとも》じゃ、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、（と云って晃に向きかえ）私《わし》に逢うて、里心が出て、君がこれなり帰るまいか、という御心配じゃ。

百合　（きまりわるげに、つと背向《せむき》になる。）

晃　ああ、それで先刻《さっき》から……馬鹿、嬰児《ねんね》だな。

学円　何かい、ちょっと出懸《でがけ》に、キスなどせんでも可《い》いかい。

晃　旦那方じゃあるまいし、鐘撞《かねつき》弥太兵衛でがんすての。

　　と両人連立ち行く。

百合　（熟としばし）まさかと思うけれど、ねえ、坊や、大丈夫お帰んなさるわねえ。おおおお目ン目を瞑って、頷いて、まあ、可愛い。（と頬摺りし）坊やは、お乳をおあがりよ。母さんは一人でお夕飯も欲しくない。早く片附けてお留守をしましょう。一人だと見て取ると、村の人が煩いから、月は可し、灯を消して戸をしめて。——

　と框にずッと雨戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸の燈、はっと消ゆ。

〽出る化ものの数々は、一ツ目、見越、河太郎、獺

に、海坊主、天守におさかべ、化猫は赤手拭(あかてぬぐい)、篠田(しのだ)に葛(くず)の葉、野干平(やかんべい)、古狸の腹鼓(はらつづみ)、ポコポン、ポコポン、コリヤ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鉄漿着女(かねつけおんな)の、けたけた笑(わらい)、里の男は、のっぺらぼう。

と唄——

与十(よじゅう)、竹の小笠(おがさ)を仰向(あおむ)けに、鯉(こい)を一尾、嬉しそうな顔して見て、ニヤニヤと笑って出づ。

与十　大(でか)い事をしたぞ。へい、雪さ豊年の兆(しるし)だちゅう、旱(ひでり)は魚(うお)の当りだんべい。大沼小沼が干たせいか、じょんじょろ水に、びちゃびちゃと泳いだ処を、ちょ

ろりと掬（しゃく）った。……（鯉跳ねる）わい！　銀の鱗（うろこ）だ。ずずんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大囲炉裡（おおいろり）の自在竹に掛った滝登りより、えッと大（でっ）え。こりゃ己（おら）がで食おうより、村会議員の髯（ひげ）どのに売るべいわさ。やれ、鯉。髯どのに身売をしろじゃ。値になれ、値になれ。（鯉跳ねる）ふぁ、銀の鱗だ。金（かね）が光る――光るてえば、鱗てえば、ここな、（と小屋を見て）鐘撞（かねつき）先生が打（ぶ）ってしめた、神官（かんぬし）様の嬢様さあ、お宮の住居（すまい）にござった時分は、背中に八枚鱗が生えた蛇体だと云っけえな。……そんではい、夜さり、夜ばいものが、寝床を覗（のぞ）くと、いつでもへい、

白蛇の長いのが、嬢様のめぐり廻って、のたくるちッて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴さえあっけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活きてござって、執殺されもさっしゃらねえ。見ろやい、取っても着けねえ処に、銀の鱗さ、ぴかぴかと月に光るちッて、汝がを、（と鯉をじろじろ）ばけものか蛇体と想うて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ処だったちゅうものだ。――嬢様が手本だよ。はってな、今時分、真暗だ。舐殺されはしねえだかん、待ちろ。（と抜足で寄って、小屋の戸の

隙間を覗く。）

蟹五郎。朱顔、蓬なる赤毛頭、緋の衣したる山伏の扮装。山牛蒡の葉にて捲いたる煙草を、シャと横銜えに、ぱっぱっと煙を噴きながら、両腕を頭上に突張り、ト鋏を極込み、踞んで横這に、ずかりずかりと歩行き寄って、与十の潜見する向脛を、かっきと挟んで引く。

与十　痛え。（と叫んで）わっ、（と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ。）ひゃあ、藪沢の大蟹だ。人殺し！

と怪し飛んで遁ぐ。——蟹五郎すかりすかりと横

に追う。

鯉七(こいしち)。鯉の精。夕顔の蔭より、するすると顕(あらわ)る。黒白鱗(こくびゃくうろこ)の帷子(かたびら)、同じ鱗形(うろこがた)の裁着(たッつけ)、鰭(ひれ)のごときひらひら足袋。件(くだん)の竹の小笠に、面(おもて)を蔽(おお)いながら来り、はたとその小笠を擲(なげう)つ。顔白く、口のまわり、べたりと髯(ひげ)黒し。蟹、これを見て引返す。

鯉七　（ばくばくと口を開けて、はっと溜息(ためいき)し）ああ、人間が旱(ひでり)の切なさを、今にして思当った。某(それがし)が水離れしたと同然と見える。……おお、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有(ありがた)かったぞ。

蟹五郎　水心、魚心だ、その礼に及ぼうかい。また、

だが、滝登りもするものが、何じゃとて、笠の台に乗せられた。

鯉七　里へ出る近道してな、無理な流（ながれ）を抜けたと思え。石に鰭が躓（つまず）いて、膚捌（はださばき）のならぬ処を、ばッさりと啖（くら）った奴よ。

蟹五郎　こいつにか。（と落ちたる笠を挟んで圧（おさ）える。）

鯉七　鬼若丸以来という、難儀に逢わせた。百姓めが、汝（うぬ）。（と笠を蹈（ふ）む。）

笠　己（おれ）じゃねえ、己じゃねえ。（と、声ばかりして蔭にて叫ぶ。）

鯉七　はあ、いかさま汝（きさま）のせいでもあるまい。助けてやろう——そりゃ行け。やい、稲が実ったら案山子（かかし）になれ！

と放す。しかけにて、竹の小笠はたはたと煽（あお）って遁（に）げる。

はははは飛ぶわ飛ぶわ、南瓜畠（かぼちゃばたけ）へ潜って候（そろ）。

蟹五郎　人間の首が飛んだ状（さま）だな、気味助（きびすけ）、気味助。かッかッかッ。（と笑い）鯉七、これからどこへ行く。

鯉七　むう、ちと里方へ用がある。ところで滝を下って来た。何が、この頃の旱（ひでり）で、やれ雨が欲しい、それ水をくれろ、と百姓どもが、姫様（ひいさま）のお住居（すまい）、夜叉ケ

池のほとりへ五月蠅きほどに集って来せる。それはまだ可い。が、何の禁厭か知れぬまで、鉄釘、鉄火箸、錆刀や、破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷っての、犬の首、猫の頭、目を剝き、髯を動かし、舌をべらべら吐く奴を供えるわ。胡瓜ならば日野川の河童が嚙ろう、もっての外な、汚穢うて汚穢うて、お腰元たちが掃除をするに手が懸って迷惑だ。

ところで、姫様のお乳母どの、湯尾峠の万年姥が、某へ内意＝＝降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすにおいてはその分に置かぬ

＝＝と里へ出て触れい、とある。ためにの、この鰭（ひれ）を煩わす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎　その事かい、御苦労、御苦労。ところで、大池の姫様（ひいさま）には、なかなか雨を下さる思召（おぼしめし）は当分ないかい。

鯉七　分らんの。旱は何も、姫様（ひいさま）御存じの事ではない。第一、其許（そこもと）なども知る通りよ。姫様は、それ、御縁者、白山（はくさん）の剣ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、そればかり思詰めてましますもの、人間の旱なんぞ構っている暇があるものかッてい。

蟹五郎　神通（じんずう）広大――俺をはじめ考えるぞ。さまで思

悩んでおいでなさらず、両袖で飜然（ひらり）と飛んで、疾（はや）く剣ヶ峰へおいでなさるが可（よ）いではないか。

鯉七　そこだの、姫様（ひいさま）が座をお移し遊ばすと、それ、たちどころに可恐（おそろ）しい大津波が起って、この村里は、人も、馬も、水の底へ沈んでしまう……

蟹五郎　何が、何が、第一俺が住居（すまい）も広うなる……村が泥沼になるを、何が遠慮だ。勧めろ、勧めろ。

鯉七　忘れたか、鐘（つりがね）がここにある。……御先祖以来、人間との堅い約束、夜昼三度、打つ鐘を、彼奴等（あいつら）が忘れぬ中（うち）は、村は滅びぬ天地の誓盟（ちかい）。姫様（ひいさま）にも随意（まま）にならぬ。さればこそ、御鬱懐（ごうつかい）、その御ふびんさ、

おいとしさを忘れたの。

蟹五郎　南無三宝（なむさんぽう）、堂の下で誓を忘れて、鐘（つりがね）の影を踏もうとした。が、山も田圃（たんぼ）も晃々（きらきら）とした月夜だ。まだまだしめった灰も降らぬとなると、俺も沢を出て、山の池、御殿の長屋へ行（ゆ）かずばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七　むむ、その儀は、ぱくりと合点（のみこ）んだ。かわりにはの、道が寂しい……里へは、きこう同道せい。

蟹五郎　帰途（かえり）はお池へ伴侶（みちづれ）だ。

鯉七　月の畷（なわて）を、唄うて行（ゆ）こうよ。

蟹五郎　何と唄う？

鯉七　＝＝山を川にしょう＝＝と唄おうよ。

蟹五郎　面白い。

と同音に、鯉はふらふらと袖を動かし、蟹は、ぱッぱッと煙（けむ）を吹いて、＝＝山を川にしょう、山を川にしょう＝＝と同音に唄い行く。行掛けて淀（よど）み、行途（むこう）を望む。

鯉七　待て、見馴（みな）れぬものが、何やら田の畝（あぜ）を伝うて来る。

蟹五郎　かッかッ、怪しいものだ。小蔭（こがく）れて様子を見んかい。

両個、姿を隠す。

百合　（人形を抱き、媚(なまめ)かしき風情にて戸を開き戸外(こがい)に出づ。）夜の長い事、長い事……何の夏が明易(あけやす)かろう。坊やも寝られないねえ、——お月様幾つ、お十三、七つ——今も誰やら唄うて通ったのをお聞きかい、——山を川にしよ——ああ、この頃では村の人が、山を川にもしたかろう、お気の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるような。晃さん、お客様の影も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂(かねつきどう)へ上(あが)りましょうね。……ひょっとかして、袖でも触って鳴ると悪いね、田圃(たんぼ)の広場へ出て見ようよ。（と小屋のうらに廻って入る。）

鯰入。花道より、濃い鼠すかしの頭巾、面一面に黒し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡い、鰭の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋総結びたる、美しき文箱を捧げて、ふらふらと出で来る。

鯰入　遥々と参った。……もっての外の旱魃なれば、思うたより道中難儀じゃ。（と遥に仰いで）はあ、争われぬ、峰の空に水気が立つ。嬉しや、……夜叉ヶ池は、あれに近い。（と辿り寄る。）

鯉、蟹、前途に立顕る。

鯉七　誰だ。これへ来たは何ものだ。

蟹五郎　お山の池の一の関、藪沢の関守が控えた。名のって通れ。

鯰入　（杖を袖にまき熟と視て）さては縁のない衆生でないの。……これは、北陸道無双の霊山、白山、剣ヶ峰千蛇ヶ池の御公達より、当国、三国ヶ岳夜叉ヶ池の姫君へ、文づかいに参るものじゃ。

鯉七　おお、聞及んだ黒和尚。

蟹五郎　鯰入は御坊かい。

鯰入　これは、いずれも姫君のお身内な。夜叉ヶ池の御眷属か。よい所で出会いました、案内を頼みましょう。

蟹五郎　お使（つかい）、御苦労です。

鯉七　ちと申つかった事があって、里へ参る路ではあれども、若君のお使、何は措（お）いてもお供しよう。姫様、お喜びの顔が目に見える。われらもお庇（かげ）で面目を施します、さぁ、御坊。

蟹五郎　さぁ、御坊。

鯰入　（ふと、くなくなとなって得（え）進まず。）しばらく。まず、しばらく。……

鯉七　御坊、お草臥（くたび）れなら、手を取りましょう。

蟹五郎　何と腰を押そうかぃ。

鯰入　いやいや疲れはしませぬ。尾鰭（おひれ）はのらのらと跳

ねるなれども、ここに、ふと、世にも気懸り（きがかり）が出来たじゃまで。

鯉七　気懸りとは？　御坊。

鯰入　ここまで辿（たど）って、いざ、お池へ参ると思えば、急にこの文箱（ふばこ）が、身にこたえて、ずんと重うなった。その事じゃ。

鯉七　恋の重荷と言いますの。お心入れの御状なれば、池に近し、御双方お気が通って、自然と文箱に籠（こも）りましたか。

蟹五郎　またかい。姫様（ひいさま）から、御坊へお引出ものなさる。……あの、黄金（こがね）白銀（しろがね）、米、粟（あわ）の湧（わき）こぼれる、石臼（いしうす）

の重量（おもみ）が響きますかい。

鯰入　（悄然（しょうぜん）として）いや、私（わし）が身に応（こた）えた処は、こりや虫が知らすと見えました。御褒美（ごほうび）に遣わさるる石臼なれば可（よ）けれども＝＝この坊主を輪切りにして、スッポン煮を賞翫（しょうがん）あれ、姫、お昼寝の御目覚ましに＝＝と記してあろうも計られぬ。わあ、可恐（おそろ）しや。

（とわなわなと蘆の杖とともにふるい出す。）

鯉七　何でまた、そのような飛んだ事を？　御坊。……

鯰入　いやいや、急に文箱（ふばこ）の重いにつけて、ふと思い出いた私（わし）が身の罪科がござる。さて、言い兼ねまし

たが打開けて恥を申そう。（と頸をすくめて、頭を撫で）……近頃、此方衆の前ながら、館、剣ケ峰千蛇ケ池へ――熊に乗って、黒髪を洗いに来た山女の年増がござった。裸身の色の白さに、つい、とろとろとなって、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつわりましたが、フトお目触りとなって、われら若君、もっての外の御機嫌じゃ。――処をこの度の文づかい、泥に潜った閉門中、ただおおせつけの嬉しさに、うかうかと出て参ったが、心付けば、早や鰭の下がくすぼったい。（とまた震う。）

蟹五郎　かッ、かッ、かッ、（と笑い）御坊、おまめで

す。あやかりたい。
鯰入　笑われますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……これは一期じゃ、何としょう。（と寂しく泣く。）

　鯉、蟹、これを見て囁き、頷く。

鯉七　いや、御坊、無い事とも言われませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立った見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中気懸りになって、密とその封じ目を切って見たれば、＝＝妹御へ、一、

この馬士の腸（はらわた）一組参らせ候（そろ）＝＝としたためられた
——何も知らずに渡そうものなら、腹を割（さ）かるる処
であったの。

鯰入　はあ、（とどうと尻餅つく。）

蟹五郎　お笑止だ。かッかッかッ。

鯉七　幸（さいわい）、五郎が鋏（はさみ）を持ちます……密（そっ）と封を切って、
御覧が可（よ）かろう。

鯰入　やあ、何と、……それを頼みたいばッかりに恥
を曝（さら）した世迷言（よまいごと）じゃ。……嬉しや、大目に見て下さ
るかのう。

蟹五郎　もっとも、もっとも。

鯉七　また……（と声を密（ひそ）めて）恋し床（ゆか）しのお文なれば、そりゃ、われわれどもがなお見たい。

鯰入　（わななきながら、文箱を押頂き、紐を解く。）鯉、蟹ひしと寄る。蓋（ふた）を放って斉（ひと）しく見る。

鯰入　やあ！

鯉七　ええええ。

蟹五郎　やあやあやあ！

鯰入　文箱（ふばこ）の中は水ばかりよ。

と云う時、さっと、清き水流れ溢（あふ）る。

鯉七　あれあれあれ、姫様（ひいさま）が。

はっと鯰入とともに泳ぐ形に腹ばいになる。蟹は

跪（ひざまず）いて手を支（つか）う。――迫上（せりあげ）にて――

夜叉ケ池の白雪姫。雪なす羅（うすもの）、水色の地に紅（くれない）の焔（ほのお）を染めたる襲衣（したがさね）、黒漆（こくしつ）に銀泥（ぎんでい）、鱗（うろこ）の帯、下締（したじめ）なし、裳（もすそ）をすらりと、黒髪長く、丈に余る。銀（しろがね）の靴をはき、帯腰に玉のごとく光輝く鉄杖（てつじょう）をはさみ持てり。両手にひろげし玉章（たまずさ）を颯（さっ）と繰落して、地摺（ちずり）に取る。

右に、湯尾峠の万年姥（まんねんうば）。針のごとき白髪（しらが）、朽葉色（くちばいろ）の帷子（かたびら）、赤前垂（あかまえだれ）。

左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萌黄（もえぎ）の紋付（もんつき）、文金の高髷（たかまげ）に緋（ひ）の乙女椿の花を挿す。両方に手を支（つ）

いて附添う。

十五夜の月出づ。

白雪　ふみを読むのに、月の明(あかり)は、もどかしいな。

姥　御前様(おんまえさま)、お身体(からだ)の光りで御覧ずるが可(よ)うござります。

白雪　（下襲(したがさね)を引いて、袖口の炎を翳(かざ)し、やがて読果てて恍惚(うっとり)となる。）

椿　姫様(ひいさま)。

姥　もし、御前様(おんまえさま)。

白雪　可懐(なつか)しい、優しい、嬉しい、お床しい音信(たより)を聞いた。……姥(うば)、私は参るよ。

姥　たまたま麓（ふもと）へお歩行（ひろい）が。

椿　もうお帰り遊ばしますか。

白雪　どこへ？……（と聞返す。）

姥　お住居（すまい）へ。

白雪　何？

姥　夜叉ヶ池へでござりましょう。

白雪　あれ、お前は何を言う……私の行くのは剣ヶ峰だよ。

一同　剣ヶ峰へ、とおっしゃりますると？

白雪　聞かずと大事ないものを——千蛇ヶ池とは知れた事——このおふみの許（とこ）へさ。（と巻戻し懐中（ふところ）に納

めて抱（いだ）く。）

姥　（居直り）また……我儘（わがまま）を仰せられます。お前様、ここに鐘（つりがね）がござります。

白雪　む、（と眦（まなじり）をあげて、鐘楼を屹（きっ）と見る。）

姥　お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様（おんまえさま）が、お座をお移しなさりますれば、幾万、何千の生類の生命（いのち）を絶たねばなりませぬ。剣ケ峰千蛇ケ池の、あの御方様とても同じ事、ここへお運びとなりますと、白山谷は湖になりますゆえ、そのために彼方（かなた）からも御越の儀は叶（かな）いませぬ。——姥（うば）はじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非

ない事にござります。

白雪　そんな、理窟を云って……姥、お前は人間の味方かい。

姥　へへ、（嘲笑い）尾のない猿ども、誰がかばいだていたしましょう。……憎ければとて、浅ましければとて、気障なればとて、たとい仇敵なればと申して、約束はかえられませぬ、誓を破っては相成りませぬ。

白雪　誓盟は、誰がしたえ。

姥　御先祖代々、近くは、両、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪　知っています。（とつんとひぞる。）

姥　もし、お前様、その浅ましい人間でさえ、約束を堅く守って、五百年、七百年、盟約《ちかい》を忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませねばこそ、朝六つ暮六つ丑満つ、と三度の鐘を絶《たや》しませぬ。この鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござります。

白雪　ええ、怨《うら》めしい……この鐘さえなかったら、（と熟《じっ》と視《み》て、すらりと立直り）衆《みな》に、ここへ来いとお言い。

椿　（立って一方を呼ぶ。）召します。姫様《ひいさま》が召しますよ。

鯉七　（立上がり一方を）やあ、いずれも早く。（と呼ぶ。）

眷属（けんぞく）ばらばらと左右に居流る。一同得（え）ものを持てり。扮装（いでたち）おもいおもい、鎧（よろい）を着（つけ）たるもあり、髑髏（どくろ）を頭（かしら）に頂くもあり、百鬼夜行の体（てい）なるべし。

虎杖　虎杖入道（いたどりにゅうどう）。

鯖江　鯖江（さばえ）ノ太郎。

鯖波　鯖波（さばなみ）ノ次郎。

この両個、「兄弟のもの。」と同音に名告（なの）る。

塚　十三塚の骨寄鬼（こつよせおに）。

蟹五郎　藪沢（やぶさわ）のお関守は既に先刻より。

椿　そのほか、夥多（あまた）の道陸神（どうろくじん）たち、こだますだま、魑魅（ちみ）、魍魎（もうりょう）。

影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまからただ灰色の布を被（かぶ）る。

影法師　影法師も交りまして。

とこの名のる時、ちらちらと遠近（おちこち）に陰火燃ゆ。これよりして明滅す。

鯉七　身内の面々、一同参り合せました。

鯰入　憚（はばか）りながら法師もこれに。……

白雪　おお、遠い路を、大儀。すぐにお返事を上げましょうね、そのために皆を呼びましたよ。

姥　や、彼方へお返事につきまして、いずれもを召しました？――仰せつけられまする儀は？

白雪　姥、どう思うても私は行く。剣ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘さえなくば盟約もあるまい……皆が、あの鐘、取って落して、微塵になるまで砕いておしまい。

姥　ええええ仰せなればと云うて、いずれも必ずお動きあるな。（眼を光らし、姫を瞻めて）まだそのようなわやくをおっしゃる。……身うちの衆をお召出し、お言葉がござりましては、わやくが、わやくになりませぬ。天の神々、きこえも可恐じゃ。……数

の人間の生命（いのち）を断つ事、きっとおたしなみなさりませい。

白雪　人の生命のどうなろうと、それを私が知る事か！……恋には我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行（ゆ）かしておくれ。

姥　ああ、お最惜（いとし）い。が、なりますまい。……もう多年（しばらく）御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は仏の末法、聖（ひじり）の澆季（ぎょうき）、盟誓（ちかい）も約束も最早や忘れておりまする。ヤッと信仰を繋（つな）ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄（つつ）いた蔓葛（つたかずら）で釣（つる）しましたようなもの、鎖も絆（きずな）も切れますのは、まのあたりでご

ざります。それまでお堪(こら)えなさりまし。

白雪　あんな気の長い事ばかり。あこがれ慕う心には、冥土(よみじ)の関を据えたとて、夜(よ)のあくるのも待たりょうか。可(よ)し、可し、衆(みな)が肯(き)かずば私が自分で。（と気が入る。）

椿　あれ、お姫様。

姥　これは何となされます……取棄てて大事ない鐘なら、お前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅(からかね)の八千貫、こう痩(や)せさらぼえた姥が腕でも、指で挟んで棄てましょうが、重いは義理でござりまするもの。

白雪　義理や掟は、人間の勝手ずく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言わるる私が身に、袖とて、褄とて、恋路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！　ああ、恋しい人のふみを抱いて、私は心も悩乱した、姥、許して！

姥　成程、お気が乱れましたな。朝六つ暮六つただ一度、今宵この丑満一つも、人間が怠れば、その時こ

そは瞬く間（ま）も待ちませぬ。お前様を、この姥がおぶい申して、お靴に雲もつけますまい。人は死のうと、溺（おぼ）れようと、峰は崩れよ、麓（ふもと）は埋れよ。剣ケ峰まで、ただ一飛び。……この鐘を撞（つ）く間（うち）に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸仏が即座のお祟（たた）り、それを何となされます！

鯉七　当国には、板取（いたどり）、帰（かえる）、九頭竜（くずりゅう）の流（ながれ）を合せて、日野川の大河。

蟹五郎　美濃の国には、名だたる揖斐（いび）川。

姥　二個（ふたつ）の川の御支配遊ばす。

椿　百万石のお姫様。

姥　我ままは……

一同　相成りませぬ。

姥　お身体(からだ)。

一同　大事にござります。

白雪　ええ、煩(うるさ)いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生(ながいき)したくば勝手におし。……生命(いのち)のために恋は棄てない。お退(ど)き、お退き。

一同、入乱れて、遮り留(とど)むるを、振払い、掻(か)い潜(くぐ)って、果(はて)は真中(まんなか)に取籠(とりこ)められる。

お退きというに、え……

とじれて、鉄杖(てつじょう)を抜けば、白銀(しろがね)の色、月に輝き、

一同は、はッと退く。姫、するすると寄り、颯と石段を駈上り、柱に縋って屹と鐘を——

諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰を蒙っても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けようと、八裂にされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるる魂は、幽な蛍の光となっても、剣ヶ峰へ飛ばいでおこうか。

と晃然とかざす鉄杖輝く……時に、月夜を遥に、唄の声す。

＝＝ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守はどこへいた、山を越えて里へ行た、里の土産に何貰う

た、でんでん太鼓に笙（しょう）の笛＝＝

白雪　（じっと聞いて、聞惚（ききほ）れて、火焔（かえん）の袂（たもと）たよたよとなる。やがて石段の下を呼んで）姥、姥、あの声は？……

姥　社（やしろ）の百合でございます。

白雪　おお、美しいお百合さんか、何をしているのだろうね。

姥　恋人の晃の留守に、人形を抱きまして、心遣（こころや）りに、子守唄をうたいまする。

白雪　恋しい人と分れている時は、うたを唄えば紛れるものかえ。

姥　おおせの通りでござります。

一同　姫様（ひいさま）、遊ばして御覧じませぬか。

白雪　思いせまって、つい忘れた。……私がこの村を沈めたら、美しい人の生命（いのち）もあるまい。鐘を撞（つ）けば仇（あだ）だけれども、（と石段を静（しずか）に下りつつ）この家（や）の二人は、嫉（ねたま）しいが、羨（うらやま）しい。姥、おとなしゅうして、あやかろうな。

姥　（はらはらと落涙して）お嬉しゅう存じまする。

白雪　（椿に）お前も唄うかい。

椿　はい、いろいろのを存じております。

鯉七　いや、お腰元衆、いろいろ知ったは結構だが、

近ごろはやる＝＝池の鯉よ、緋鯉（ひごい）よ、早く出て麩（ふ）を食え＝＝などと、馬鹿にしたようなのはお唄いなさるな、失礼千万、御機嫌を損じよう。

椿　まあ……お前さんが、身勝手な。

一同　（どっと笑う。）――

白雪　人形抱いて、私も唄おう……剣ケ峰のおつかい。

鯰入　はあ、はあ、はッ。

白雪　お返事を上げよう……一所に――椿や、文箱（ふばこ）をお預り。――衆（みな）も御苦労であった。

一同敬う。＝でんでん太鼓に笙（しょう）の笛、起上り小法師（こぼし）に風車（かざぐるま）＝＝と唄うを聞きつつ、左右に分

れて、おおいに一同入る。陰火全く消ゆ。月あかりのみ。遠くに犬吠(ほ)え、近く五位鷺(ごいさぎ)啼(な)く。お百合、いきを切って、褄(つま)もはらはらと遁(に)げ帰り、小家(こや)の内に駈入(かけい)り、隠る。あとより、村長畑上嘉伝次(はたがみかでんじ)、村の有志権藤(ごんどう)管八、小学校教員斎田初雄、村のものとともに追掛(おっか)け出づ。一方より、神官代理鹿見宅膳(しかみたくぜん)、小力士(こりきし)、小烏風呂助(こがらすふろすけ)と、前後(あとさき)に村のもの五人ばかり、烏帽子(えぼし)、素袍(すおう)、雑式(ぞうしき)、仕丁(しちょう)の扮装(いでたち)にて、一頭の真黒(まっくろ)き大牛を率いて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。

村一　内へ隠れただ、内へ隠れただ。

村二　真暗（まっくら）だあ。

初雄　灯（あかり）を消したって夏の虫だに。

管八　踏込（ふんご）んで引摺出（ひきずりだ）せ。

村のもの四五人、ばらばらと跳込（おどりこ）む。内に、あれあれと言う声。雨戸ばらばらとはずるる。真中（まんなか）に屹（きっ）となり——左右を支えて、

百合　何をおしだ、人の内へ。

管八　人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄　焼土（やけつち）になろう、野原に焦（こ）げようという場合であるです。

宅膳　（ずっと出で）こりゃ、お百合、見苦しい、何をざわつく。唯今も、途中で言聞かした通りじゃ。汝に白羽の矢が立ったで、否応はないわ。六ケ村の水切れじゃ。米ならば五万石、八千人のために、雨乞の犠牲になりましょう！　小児のうちから知ってもおろうが、絶体絶命の旱の時には、村第一の美女を取って裸体に剥き……

百合　ええ。（と震える。）

宅膳　黒牛の背に、鞍置かず、荒縄に縛める。や、もっとも神妙に覚悟して乗って行けば縛るには及ばんてさ。……すなわち、草を分けて山の腹に引上せ、夜

叉ケ池の竜神に、この犠牲（いけにえ）を奉るじゃ。が、生命（いのち）は取らぬ。さるかわり、背に裸身（はだかみ）の美女を乗せたまま、池のほとりで牛を屠（ほふ）って、角ある頭（こうべ）と、尾を添えて、これを供える。……肉は取って、村一同冷酒（ひやざけ）を飲んで啖（くら）えば、一天たちまち墨を流して、三日の雨が降灌（ふりそそ）ぐ。田も畠（はた）も蘇生（よみがえ）るとあるわい。昔から一度もその験（しるし）のない事はない。お百合、それだけの事じゃ。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立とう、立とう、立ちましょう。

百合　叔父さん、何にも申しません、どうぞ、あの、晃さん、旦那様のお帰りまでお待ちなすって下さい

まし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拝みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八　何だとう？

初雄　貴女(あなた)、お百合さん、何ですか。

百合　叔父さん、後生でございます……晃さんの帰りますまで。

宅膳　またしても旦那様じゃ。晃、晃と呆(あき)れた奴(やつ)めが。これ、潮(うしお)の満干(みちひ)、月の数……今日の今夜の丑満(うしみつ)は過されぬ。立ちましょう、立ちましょう。

管八　言うことを肯(き)かんと縛(くく)り上げるぞ。

嘉伝次　村、郡のためじゃ、是非がない。これ、はい、
　気の毒なものじゃわい。
管八　お神官、こりゃいかんでえ？
宅膳　引立てて可うござる。
管八　来い、それ。
　と村のもの取込むる。百合遁げ迷う。
風呂助　埒あかんのう。私にまかせたが可うござんす。
　とのさばり掛り、手もなく抱すくめて摑み行く。
　仕丁手伝い、牛の背に仰けざまに置く。
百合　ああれ。（と悶ゆる。）
　胴にまわし、ぐるぐると縄を捲く。お百合背を捻

じて面（おもて）を伏す。黒髪颯（さっ）と乱れて長く牛の鰭爪（ひづめ）に落つ。

嘉伝次　宅膳どん、こりや、きものを着ていて可（よ）いかい。

宅膳　はあ、いずれ、社（やしろ）の森へ参って、式のごとく本支度に及びまするて。社務所には、既に、近頃このあたりの大地主になれらましたる代議士閣下をはじめ、お歴々衆、村民一同の事をお憂慮（きづかい）なされて、雨乞（あまごい）の模様を御見物にお揃いでござりますてな。

嘉伝次　その事じゃっけね。

初雄　皆、急ぐです。

管八　諸君努力せよかね、はははは。

一同、どやどやと行きかかる。

晃　（衝と来り、前途に立って、屹と見るより、仕丁を左右へ払いのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取って向け、手綱を、ぐい、と緊めて、ずかずか我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、無言のまま、お百合のいましめの縄をふッと切る。）

百合　（一目見て）おお晃さん、（ところげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帯の腰に取縋り）旦那様、いい処へ。貴下。どうして、まあ、よく、まあ、早う帰って下さいました、ねえ。

晃　（百合を背後に庇い、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる声にて）ああ、夜叉ケ池へ――山路、三の一ばかり上った処で、峰裏幽に、遠く池ある処と思うあたりで、小児をあやす、守唄の声が聞えた。……唄の声がこの月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織って、目に蒼く映ったと思え。……伴侶が非常に感に打たれた。――山沢には三歳になる小児がある。……里心が出て堪えられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他国に徜徉うことはまた、来る年の首途にしよう。帰り風が颯と吹く、と身体も寒くなったと云う。私もしきりに胸騒ぎが

する。すぐに引返して帰ったんだよ。（と穏に、百合に向って言い果てると、すッと立って、瓢を逆に、月を仰いで、ごッと飲む。）

百合、のび上って、晃が紐を押え頸に掛けたる小笠を取り、瓢を引く。晃はなすを、受け取って框におく。すぐに、鎌を取ろうとする。晃、手を振って放さず、お百合、しかとその晃の鎌を持つ手に縋りいる。

晃　帰れ、君たちア何をしている。

初雄　更めて断るですがね、君、お気の毒だけれども、もう、村を立去ってくれたまえ。

晃　俺をこの村に置かんと云うのか。

初雄　しかりです。――御承知でもあるでしょう、また御承知がなければ、恐らく白痴（ばか）と言わんけりゃならんですが、この旱（ひでり）です、旱魃（かんばつ）です。……一滴の雨といえども、千金、むしろ万金の場合にですな。君が迷信さるる処のその鐘（つりがね）はです。一度でも鳴らさない時はすなわちその、村が湖になると云うです。湖になる……結構ですな。望む処である、です、から、して、からに、そのすなわちです。今夜からしてお撞（つ）きなさらない事にしたいのです。鐘を撞かん事になってみる日になってみると、いたしてから、

その、鐘を撞くための君はですな、名は権助と云うかどうかは分からんですが、ええん！

村二三　ひやひや。（と云う。）

村四五　撞木野郎（しゅもくやろう）、丸太棒（まるたんぼう）。（と怒鳴る。）

初雄　えへん、君はこの村において、肥料（こやし）の糟（かす）にもならない、更に、あえて、しかしてその、いささかも用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きになるのを、お断りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。

村二三　そうだ、そうだとも。

晃　望む処だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言わるるから、俺には約束がある……義に依て守っていたんだ。鳴らすなと言うに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時にここを去る。

村四五　出て行け、出て行け。（と異口同音。）

晃　お百合行こう。——（そのいそいそ見繕いするを見て）支度が要るか、跣足で来い。茨の路は負って通る。（と手を引く。）

お百合その袖に庇われて、大勢の前を行く。——忍んで様子を見たる、学円、この時密とその姿を顕す。

管八　（悪く沈んだ声して）おいおい、おい待て。

晃　（構わず、つかつかと行く。）

管八　待て、こら！

晃　何だ。（と衝（つつ）と返す。）

管八　汝（きさま）、村のものは置いて行（ゆ）け。

晃　塵（ちり）ひとっ葉（ぱ）も持っちゃ行かんよ。

管八　その婦（おんな）は村のものだ。一所に連れて行（ゆ）く事は出来ないのだ。

晃　いや、この百合は俺の家内だ。

嘉伝次　黙りなさい。村のものじゃわい。

晃　どこのものでも差支えん、百合は来たいから一所

に来る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋って離れやせん。（微笑して）置いて行けば百合は死のう……人は、心のままに活きねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行こう。

宅膳　（のしと進み）これこれ若いもの、無分別はためにならんぞ。……私が姪は、ただこの村のものばかりではない。一郡六ケ村、八千の人の生命じゃ、雨乞の犠牲にしてな。それじゃに、……その犠牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主が奪取って行くも同然。百合を置いて行かん事には、ここは一足も通されんわ。百合は八千の人の生命じゃ

が。……さあ、どうじゃい。

学円　しばらく、（声を掛け、お百合を中に晃と立並ぶ。）その返答は、萩原からはしにくかろう。代って私(わし)が言う。——いかにも、お百合さんは村の生命(せいめい)じゃ。それなればこそ、華冑(かちゅう)の公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、ただ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか——既に、この人を手籠(てご)めにして、牛の背に縄目の恥辱(ちじょく)を与えた諸君に、論は無益と思うけれども、衆人環(めぐ)り視(み)る中において、淑女の衣(ころも)を奪うて、月夜を引廻すに到っては、主、親を殺した五逆罪の極悪人を罪するにも、洋の東西に

いまだかつてためしを聞かんぞ！
そりゃあるいは雨も降ろう、黒雲も湧き起ろうが、それは、惨憺たる黒牛の背の犠牲を見るに忍びないで、天道が泣かるるのじゃ。月が面を蔽うのじゃ。天を泣かせ、光を隠して、それで諸君は活きらるるか。稲は活きても人は餓える、水は湧いても人は渇える。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠って、万一、地が泥海になったらどうする！　六ヶ村八千と言わるるか、その多くの生命は、諸君が自ら失うのじゃ。同じ迷信と言うなら言え。夫婦仲睦じく、一生埋木となる

までも、鐘楼（しょうろう）を守るにおいては、自分も心を傷（きずつ）けず、何等世間に害がない。

管八　黙れ、煩（うるさ）い。汝（うぬ）が勝手な事を言うな。

初雄　一体君は何ものですか。

学円　私（わし）か、私は萩原の親友じゃ。

宅膳　藪（やぶ）から坊主が何を吐（ぬか）す。

学円　いかにも坊主じゃ、本願寺派の坊主で、そして、文学士、京都大学の教授じゃ。山沢学円と云うものです。名告（なの）るのも恥入りますが、この国は真宗門徒信仰の淵源地（えんげんち）じゃ。諸君のなかには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあろうかと思うて云います。

（教員に）君は学校の先生か、同一教育家じゃ。他人でない、扱うてくれたまえ。（神官に）貴方も教えの道は御親類。（村長に）村長さんの声名にもお縋り申す。……（力士に）な、天下の力士は俠客じゃ、男立と見受けました。……何分願います、雨乞の犠牲はお許しを頼む。

これがために一同しばらくためらう。……代議士穴隈鉱蔵、葉巻をくゆらしながら、悠々と出づ。

鉱蔵　其奴等騙賊じゃ。また、騙賊でのうても、華族が何だ、学者が何だ、糧をどうする!……命をどうする?……万事俺が引受けた。遣れ、汝等、裸にし

ようが、骨を抜こうが、女郎（めろう）一人と、八千の民、誰（たれ）か鼎（かなえ）の軽重（けいちょう）を論ぜんやじゃ。雨乞を断行せい。

力士真先（まっさき）に、一同ばらりと立懸（たちかか）る。

学円　私（わし）を縛（しば）れ、（と上衣（うわぎ）を脱ぎ棄て）かほど云うても肯入（ききい）れないなら止（や）むを得ん、私（わし）を縛れ、牛にのせい。

晃　（からりと鎌を棄て）いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂（やつざき）にしろ、俺は辞せん。――牛に乗せて夜叉ケ池に連れて行（ゆ）け。犠牲（にえ）によって、降らせる雨なら、俺が竜神に談判してやる。

百合　あれ、晃さん、お客様、私が行きます、私を遣って下さいまし。

晃　ならん、生命（いのち）に掛けても女房は売らん、竜神が何だ、八千人がどうしたと！　神にも仏にも恋は売らん。お前が得心で、納得して、好んですると云っても留めるんだ。

鉱蔵　（ふわふわと軽く詰め寄り、コツコツと杖を叩いて）血迷うな！　たわけも可（い）い加減にしろ、女も女だ。湯屋へはどうして入る？……うむ、馬鹿が！（と高笑いして）君たち、おい、いやしくも国のためには、妻子を刺殺（さしころ）して、戦争に出るというが、男児たるものの本分じゃ。且つ我が国の精神じゃ、すなわち武士道じゃ。人を救い、村を救うは、国家のた

めに尽すのじゃ。我が国のために尽すのじゃ。国のために尽すのに、一晩嬶々を牛にのせるのが、さほどまで情ないか。洟垂しが、俺は料簡が広いから可いが、気の早いものは国賊だと思うぞ、汝。俺なぞは、鉱蔵は、村はもとよりここに居るただこの人民蒼生のためというにも、何時でも生命を棄てるぞ。

時に村人は敬礼し、村長は頤を撫で、有志は得意を表す。

晃　死ね！（と云うまま落したる利鎌を取ってきっと突つく。）

鉱蔵　わあ。（と思わず退(さが)る。）

晃　死ね、死ね、死ね、民のために汝(きさま)死ね。見事に死んだら、俺も死んで、それから百合を渡してやる。死ね、死(し)なないか。

とじりりと寄るたび、鉱蔵ひょこひょこと退る。お百合、晃の手に取縋ると、縋られた手を震わしながら、

し、しからずんば決闘せい。

一同その詰寄るを、わッわと遮り留(と)む。

傍(そば)へ寄るな、口が臭いや、こいつらも！　汝等(きさまら)は、その成金(なりきん)に買われたな。これ、昔も同じ事があった。

白雪、白雪という、この里の処女だ。権勢と迫害で、可厭（いや）がるものを無理に捉（とら）えて、裸体（はだか）を牛に縛（いまし）めて、夜叉ケ池へ追上せた。……処女は、口惜（くや）しさ、恥かしさ、無念さに、生きて里へ帰るまい。其方（そなた）も、……其方も……追っては屠（ほふ）らるる。同じ生命（いのち）を、我に与えよ、と鼻頭（はなづら）を撫でて牛に言い含め、終夜（よもすがら）芝を刈りためたを、その牛の背に山に積んで、石を合せて火を放つと、鞭（むち）を当てるまでもない。白い手を挙げ、衝（つ）とさして、麓（ふもと）の里を教うるや否や、牛は雷（いかずち）のごとく舞下（まいさが）って、片端（かたっぱし）から村を焼いた。……麓にぱっと塵（ちり）のような赤い焔（ほのお）が立つのを見て、笑（えみ）を含んで、

白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたというのを聞かぬか。忘れたか。汝等。おれたちに指でも指してみろ、雨は降らいで、鹿見村は焔になろう。不埒（ふらち）な奴等だ。

鉱蔵　世迷言（よまいごと）を饒舌（しゃべ）るな二才。村は今既に旱（ひでり）の焔に焼けておる。それがために雨乞するのじゃ。やあ衆（みんな）、手ぬるい、遣れ遣れ。（いずれも猶予するを見て）埒明（らちあ）かんな、伝吉ども来い。（と喚（わめ）く。）

博徒伝吉、威（おどし）の長ドスをひらめかし、乾児（こぶん）、得ものを振って出づ。

伝吉　畳んでしまえ、畳んでしまえ。

乾児　合点（がってん）だ。

晃　山沢、危いぞ。

とお百合を抱くようにして三人鐘楼(しょうろう)に駈上(かけあが)る。学円は奥に、上り口に晃、お百合、と互に楯(たて)にならんと争う。やがて押退(おしの)けて、晃、すっくと立ち、鎌を翳(かざ)す。博徒、衆ともに下より取巻く。お百合、振上げたる晃の手に縋(すが)る。

一同　遣れ遣れ、遣っちまえ、遣っちまえ。

学円　言語道断、いまだかつて、かかる、頑冥暴虐(がんめいぼうぎゃく)の民を知らん！　天に、――天に銀河白し、滝となって、落ちて来い。（合掌す。）

晃　大事な身体(からだ)だ、山沢は遁(に)げい、遁げい。

と呼ばわりながら、真前（まっさき）に石段を上れる伝吉と、二打三打（ふたうちみうち）、稲妻のごとく、チャリリと合す。

伝吉退く。時に礫（つぶて）をなげうつものあり。

晃　（額に傷（きずつ）き血を圧（おさ）えて）あッ。（と鎌を取落す。）

百合　（サソクにその鎌を拾い）皆さん、私が死にます、言分（いいぶん）はござんすまい。（と云うより早く胸さきを、かッしと切る。）

晃　しまった！（と鎌を捩取（もぎと）る。）

百合　晃さん——御無事で——晃さん。（とがっくり落入る。）

一同色沮（いろはば）みて茫然（ぼうぜん）たり。

晃　一人は遣らん！　茨(いばら)の道は負(おぶ)って通る。冥土(めいど)で待てよ。（と立直る。お百合を抱(いだ)ける、学円と面(おもて)を見合せ）何時だ。（と極めて冷静に聞く。）

学円　（沈着に時計を透かして）二時三分。

晃　むむ、夜(よ)ごとに見れば星でも了(わか)る……ちょうど丑満(うしみつ)……そうだろう。（と昂然(こうぜん)として鐘を凝視し）山沢、僕はこの鐘を撞(つ)くまいと思う。どうだ。

学円　（沈思の後）うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃　（鎌を上げ、はた、と切る。どうと撞木(しゅもく)落つ。）

途端にもの凄(すさま)じき響きあり。——地震だ。——

山鳴(やまなり)だ。――夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。真暗(まっくら)な雲が出た、――と叫び呼(よば)わる程こそあれ、閃電(せんでん)来り、瞬く間も歇(や)まず。衆は立つ足もなくあわて惑う、牛あれて一蹴(け)りに駈(か)け散らして飛び行(ゆ)く。

鉱蔵　鐘を、鐘を――

嘉伝次　助けて下され、鐘を撞(つ)いて下されのう。

宅膳　救わせたまえ。助けたまえ。

と逃げまわりつつ、絶叫す。天地晦冥(かいめい)。よろぼい上るもの二三人石段に這(は)いかかる。

晃、切払い、追い落し、冷々然として、峰の方(かた)に

向って、学円と二人彫像のごとく立ちつつあり。

晃　波だ。

と云う時、学円ハタと俯伏（うつぶ）しになると同時に、晃、咽喉（のど）を斬（き）って、うつぶし倒る。

白雪。一際烈（ひときわはげ）しきひかりものの中（うち）に、一たび、小屋の屋根に立顕（たちあらわ）れ、たちまち真暗（まっくら）に消ゆ。再び凄（すさま）じき電（いなびかり）に、鐘楼に来り、すっくと立ち、鉄杖（てつじょう）を丁（ちょう）と振って、下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆらゆらとなって傾く。

村一同昏迷（こんめい）し、惑乱するや、万年姥（まんねんうば）、諸眷属（しょけんぞく）とともに立ちかかって、一人も余さず尽（ことごと）く屠（ほふ）り殺す。

——

白雪　姥（うば）、嬉しいな。

一同　お姫様。（と諸声凄（もろごえすご）し。）

白雪　人間は？

姥　皆、魚（うお）に。早や泳いでおります。田螺（たにし）、鰌（どじょう）も見えまする。

一同　（哄（どっ）と笑う）はははははは。

白雪　この新しい鐘ケ淵（ふち）は、御夫婦の住居（すまい）にしょう。皆おいで。私は剣ケ峰へ行（ゆ）くよ。……もうゆきかよいは思いのまま。お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたいましょうね。

たちまちまた暗し。既にして巨鐘（きょしょう）水にあり。晃、お百合と二人、晃は、竜頭（りゅうず）に頬杖（ほおづえ）つき、お百合は下に、水に裳（もすそ）をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟（じっ）と顔を見合せ莞爾（にっこり）と笑む。

時に月の光煌々（こうこう）たり。

学円、高く一人鐘楼（しょうろう）に佇（たたず）み、水に臨んで、一揖（いちゆう）し、合掌す。

月いよいよ明（あきらか）なり。

（――幕）

大正二（一九一三）年三月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
１９９５（平成７）年12月４日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集」岩波書店
１９４２（昭和17）年７月刊行開始
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：染川隆俊
２００２年２月22日公開
２００５年９月26日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。